

研究テーマ 病棟看護師のアドバンス・ケア・プランニング初回介入のタイミング

病 院 名 医療法人社団健育会 石巻健育会病院

演 者 ○西條^{さいじょうあき}亜紀(看護師) 庄司正枝(看護師) 遠藤千恵(看護師)
渡邊大地子(看護師) 武山裕美子(看護師) 阿部美穂(看護師)

概 要

【緒言】

病棟看護師(以下看護師とする)はアドバンス・ケア・プランニング(以下ACPとする)について患者への説明のタイミングに困っているとの報告がある。ACPを切り出すタイミングは難しく、初回介入における看護師の困難感や躊躇が否めない。

【目的】

看護師がどのような視点でACPを実践しているか、初回介入時のタイミングを明らかにする。

【方法】

1. 研究デザイン:質的研究
2. 期間:202X年6月～10月
3. 対象者:A病院でACP初回介入を経験した看護師10名
4. データ収集方法:
 - 1) 調査内容:年齢等基本属性5項目
 - 2) 半構造化インタビューを実施
 - ・対象者は介入事例を3事例準備
 - ・〈事例振り返りシート〉にて想起〈事例振り返りシート〉
 - ・患者情報:年代等4項目
 - ・インタビューガイドの内容「どのタイミングで意向確認を行ったか」等は事前に伝えた。
5. データ分析方法:
 - ・基本属性は単純集計
 - ・語りの意味内容を損なわないよう逐語録化しコード化、カテゴリー化した。
 - ・言葉のニュアンスを崩さないように研究者複数で要約し率直に記述した。
6. 倫理的配慮:A病院倫理審査委員会の承認を得た(承認番号:25-1)。対象者には調査内容、個人の匿名化及び情報管理、学術集会での発表について書面で説明し同意書にて同意を得た。

【結果】

看護師の経験年数は平均22.7年だった。介入事例は30事例、70代以上の高齢者が多く癌や慢性的な疾患等の患者だった。ACP初回介入のタイミングとして、256のコード、40のカテゴリーを抽出した。40のカテゴリーは【患者が治療をはっきりと拒否した】等17のカテゴリーを「患者の状況」、【家族が患者を自宅に連れて帰りたいと希望した】等4のカテゴリーを「家族の状況」、【師長や看護部長からACPを介入したほうが良いとアドバイスがあった】等4のカテゴリーを「組織のACP支援体制」、【患者の最善を考え看護師の立場でなんとかしてあげたいと思った】等8のカテゴリーを「看護師の判断」、【介入のため患者や家族と対話し信頼関係を築いた】等7のカテゴリーを「看護師の工夫」に分類した。

【考察】

「患者の状況」では、患者の明確な意思表示があった時等、「家族の状況」では、家族が自宅退院を希望した時等に看護師は介入のタイミングを掴んでいた。「看護師の判断」では、患者の最善を考え倫理的な思考で介入のタイミングを判断し、「看護師の工夫」では、能動的な働きかけを行い対話の機会を逃さず常に準備をしていた。「組織のACP支援体制」では、職場における支援体制の整備や風土が関心につながり、初回介入を支持した。これら複数のタイミングが揃った時にACP介入が実現すると示唆された。

【結論】

40のタイミングは看護師のACP初回介入の目安になりACPに対する困難感の軽減につながる可能性がある。